

共栄遺跡B地点出土の土器について

後藤秀彦

I

共栄遺跡B地点は、浦幌町字共栄に位置し、吉野台地の東縁に位置する。(Map 2) すぐ南側には道指定史跡「浦幌新吉野台細石器遺跡」があり、十勝川の支流旧浦幌川に注ぐ小溪流が遺跡の北東に位置する小沼より流れ出ており、眼下は旧浦幌川によって形成された沖積平野となって主に畑作農業が営なまれている。遺跡は凡よ標高20mの位置に形成されている。

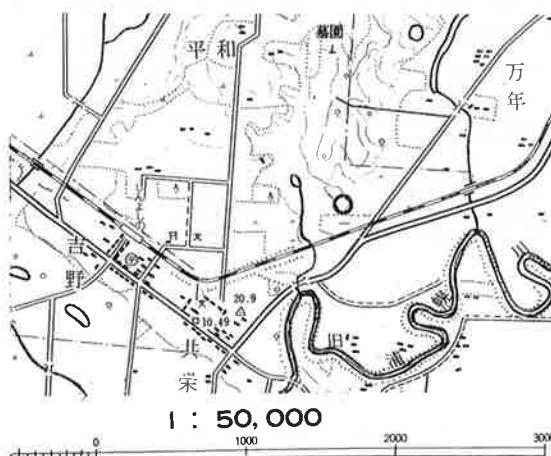
II

図示した資料は、1969（昭和44）年浦幌高校郷土研究部の諸君によって採集されたものである。

採集された破片は、10数片であったが接合の結果2個体分になった。以下この2片についてその具有する諸特徴について記述していく。

1 (Fig 1-1)

土器は、深鉢形を呈すると考えられ、口唇部及び頸部にかけて絡条体圧痕文によって単一に施文がなされ、それ以下は無文に近い。口唇部には、斜位方向に同様に口縁部にはそれと逆方向に同様な施文がなされ、更にその下には6段にわたってほぼ等間隔の施文が見られる。胎土には極めて小



Map 2 Map of Yoshino Region showing the Location of Kyoei site (Mark : ○)

粒の石が少量見受けられ、植物纖維の含有は認められない。土器の厚さは、ところによって若干の差はあるが7~8mmであり、口唇部は丸味を帶いでいる。裏面は、横位の擦痕が若干認められる程度で色調は黒色乃至黄褐色で裏面は、一様に茶褐色を呈している。

2 (Fig 1-2)

本土器は、1と極めて酷似した特徴をもっている。ただ、絡条体圧痕文の方向が一部逆であることと、補修孔を各々結ぶ線が掘りこまれていることのみが異なる点である。裏面には1mm程度の厚さに炭化物が一面に付着している。他の様相は1と全く同じである。

III

ここに図示した資料は、その具有する諸特徴から浦幌式に比定されると考えられる。本型式は浦幌新吉野台細石器遺跡がタイプ・サイトであるが報告書が提出されていないため型式概念自体不明な点が少くないが、調査者の1人である名取武光氏が断片的に述べている点を検討してみると、深鉢形を呈した平底土器で文様は口頸部に絡条体圧痕文のみにて施文され、胴部以下は無文または条痕文を呈しているものと解される。

こうした土器は、浦幌新吉野台細石器遺跡において町内で発見されている他、浦幌高校郷土研究部所蔵の生剛遺跡の資料の中に1片あるのを見たことがある。浦幌町郷土博物館には、浦幌新吉野台細石器遺跡出土の資料が収蔵されている。本資料は、土地所有者である飯山伝平氏が1950（昭和25）年の発掘調査後表採したものであるがこの中にも2~3浦幌式の様相を呈した土器がある。^{註1}これらについては、将来機会を見て一括報告したいと思う。

浦幌式の編年的位置については、沢四郎氏がテンネル式に後続させているが、筆者もこれを指示するものである。即ち、大樂毛式に後続するテンネル式は、端緒的な絡条体圧痕文と縦位を主とす

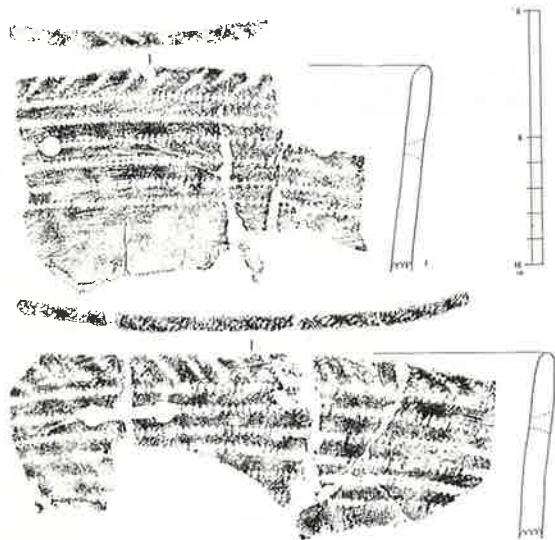


Fig 1 Potteries From Kyoei site B point

る集合沈線、もしくは無文で形成されテヌル式^③に比定されると思われる暁式の中にはテヌル式にもある半割竹管状の刺突文の認められるものもあり、浦幌式は、テヌル式・暁式等の土器群に後続するものと考えてよいように思う。こうしたテヌル式・暁式・平和遺跡出土の下頃辺下層式と仮称された土器・中富良野町本幸遺跡辺地点第4層出土の土器・鷦川町二宮出土の土器等の分布範囲は一部の例外を除けば石刃鎌文化の分布とほぼ一致することを考え合せても、浦幌式の位置といったものが決定されてくるであろう。こうしたテヌル式類似の土器群は、最近になって特に十勝地域から断片的にではあるが検出されるようになりテヌル式～浦幌式の関係——特に石器の伴出——が明確になってくるであろう。

以上、全道的に資料の乏しい浦幌式の新資料を概説的ながら紹介してきた。これが諸先学の参考となれば幸いと感じ、また常日頃お世話になっている釧路市立郷土博物館の沢四郎先生、札幌啓成高校の堀野昭先生、帯広柏葉高校の石橋次雄先生にお礼を申し上げてペンを置きたい。

(浦幌町郷土博物館)

註

註1 浦幌新吉野台細石器遺跡で地主飯山伝平氏が採集した資料の中には凡そ次のようなものがある。石刃鎌・石核・石錐・石刃等の石器、沼尻式・大楽毛式・浦幌式・東釧路Ⅲ式より若干新しい

と考えられる土器等の土器片。

引用文献

- ①浦幌高校郷土研究部『浦幌町を探る——その2——先史遺跡の現状——保護と対策について』1970
- ②沢四郎「釧路川流域の先史時代」(『釧路川——その自然と生活』) 1969
- ③沢四郎「北海道釧路村テンネル第1地点出土の土器について」(『釧路の古代文化』6) 1964
- ④明石博志「暁遺跡——帶広市暁台地遺跡調査報告——」(『郷土十勝』5) 1965
- ⑤浦幌町教育委員会『平和遺跡』1971
- ⑥山崎博信「中富良野町本幸遺跡発掘報告辺地点」1968
- ⑦藤本英夫「底面にホッキ貝のある土器」(『先史時代』3) 1956
- ⑧藤本英夫「鷦川町二宮出土のホタテ貝文土器」(『アイヌ・モシリ』5・6合併号) 1961
- ⑨明石博志・佐藤訓敏「暁式土器文化の新資料」(『郷土十勝』10) 1973

(追記) 1971(昭和46)年7月、筆者は共栄遺跡B地点で石刃鎌の先端部1本を表探した。資料は、浦幌高校郷土研究部が所蔵している。

編 集 後 記

『浦幌町郷土博物館報告』第4号をお届けします。本報告も本年12月25日をもって発刊1周年を迎えることになります。夏には約84日間の十勝太若月遺跡の発掘調査があり第3号以来8ヶ月の月日を空白に終らせたことに深くおわび申し上げて編集後記といたします。 . . . (H・G)

1973年12月15日	印 刷
1973年12月20日	發 行
編 集 後 藤 秀 彦	
發行責任者 野 沢 貞 男	
發 行 所 浦幌町郷土博物館 (089-56)	
北海道十勝郡浦幌町字東山町23番地	
印 刷 所 大同出版紙業株式会社	
北海道帯広市西7条南6丁目	